

特別支援学校における教員と保護者の関係の在り方

～教員・保護者に対する質問紙調査の結果から～

Relation between Teachers and Parents in Special Support School

吉田 愛美¹ 相磯 友子²

本稿では、知的障害特別支援学校における教員と保護者の関係の在り方を、両者の視点から検討することを目的として、教員と保護者に質問紙調査を実施した。その結果、教員が「保護者との関係で大切にしていること」と、保護者が「教員にしてもらった嬉しかったサポート」は、概ね一致していた。保護者は教員との関係において、信頼でき、「何でも話せる関係」、「一緒に子どもを育てる関係」、「人と人としての関係」を望んでいた。このような関係を築くためには、教員と保護者が互いに子どもの成長イメージや子どもへの願いを共有することが重要であると考えられた。教員と保護者間では、すでに学校場面における子どもの情報が共有されていたが、家庭での生活場面における子どもの情報を共有することで、子どもの成長イメージを共有することができ、両者の関係構築に繋がることが示唆された。

キーワード：特別支援学校、教員と保護者の関係、質問紙調査

1. 問題と目的

2008年、本学の実習の一環で船橋市立船橋特別支援学校に行った。実習が始まる前はどのような支援ができるのか、筆力が力になれるのかと不安ばかりだった。しかし、実習が始まり、子どもたちが毎日とてもイキイキと楽しそうに過ごしている姿を見て、感銘を受けた。そして、実習をしていく中で、支援の難しさを感じながら、子どもたちの笑顔に元気をもらうことが何度もあった。そこで、もっとこの子どもたちを知りたい、もっと子どもたちの力になりたい、深く付き合っていきたいと強く思い、特別支援教諭を目指そうと考えた。

特別支援学校における実習の中で、保護者の子育ての思いを理解した上で、子どもや保護者と関わるために、特に重要だと感じたのは、教員と保護者の関係である。教員と保護者の連携については、小・中学校における巡回相談による事例研究から「保護者への支援」という視点、中でも、保護者の「障害

認識」に焦点を当てた研究がある（吉岡，2008）。また、特別支援学校、特別支援学級における教員と保護者の連携に関する研究がある（吉岡，2009）。いずれの研究においても、教員の視点から「保護者支援」に焦点を当て、教員と保護者の連携を論じている。しかし、特別支援学校における教員と保護者の連携を両者の視点から「教員と保護者の関係」に焦点を当て論じた研究は見られない。

そこで、本研究では、障害のある子どもを育てる上で、保護者がどのようなサポートを必要としているのか、また、教員と保護者がどのような関係を築いているのか、質問紙調査の結果をもとに考察し、教員と保護者の関係の在り方を検討することを目的とする。

2. 研究方法

本研究では研究方法として、質問紙調査を採用した。

1 松戸市立中部小学校非常勤講師

2 植草学園短期大学

- (1) 対象：知的障害特別支援学校教員 25名
知的障害特別支援学校保護者 55名
- (2) 実施手順：質問紙調査の実施にあたっては、筆者がボランティアや実習などで関わりの深かった千葉県内のF知的障害特別支援学校に依頼した。質問用紙は回答者のプライバシーには充分配慮し、今後活かせるような論文を作成したいと考え、作成した。事前に校長先生に内容を確認してもらい、実施の許可を得た。教員には筆者が配布し、保護者の方々には教員から配布して頂き、回答は郵送にて回収した。回収率はそれぞれ教員52%、保護者27%であった。実施時期は2008年11月であった。

(3) 質問項目：

〈保護者〉性別、年代、子どもの学年、子育てをしていて嬉しかったこと、子育てをしていて心がけていること、子育てをする上で支えられた人、どんな時に支えられたか、教員にしてもらって嬉しかったサポート、教員に求めるサポート、教員とどんな関係を築いていきたいか
 〈教員〉性別、教員歴、教員をしていて嬉しかったこと、教員をしていて苦労したこと、子どもとの関わりで大切にしていること、保護者との関わりで大切にしていること、保護者との関係で失敗したこと

3. 結果と考察

(1) 回答者の概要

(2) 保護者の回答

1) 子育てをしていて嬉しかったこと

表6 子育てをしていて嬉しかったこと

〈保護者の概要〉

表1 性別

男性	0名
女性	15名
合計	15名

表2 年代

20代	1名
30代	4名
40代	9名
50代	1名
合計	15名

表3 子どもの学年

小学部低学年	6名
小学部中学年	5名
小学部高学年	4名
合計	15名

〈教員の概要〉

表4 性別

男性	4名
女性	8名
合計	12名

表5 教員歴

1年～10年	6名
11年～20年	2名
21年以上	4名
合計	12名

回答抜粋	保護者
子供が笑顔を見せてくれた時。嫌なことを忘れて一緒に笑っている時。なんでも「初めて」できたコトは普通の子育ての何倍も嬉しいです。	(20代女性)
発達的に遅れはあるものの、ほんの少しずつ出来るが増えて、コミュニケーションもほんの少し出来るようになっていくこと。	(40代女性)
楽しい行事もたくさんあり、学校から帰ってくる時ニコニコしている。学校と家庭と一緒に取り組んでいる事が自分でできるようになった時。	(40代女性)

- ① 子どもの成長を感じた時。
- ② 子どもの笑顔。
- ③ 言葉でのコミュニケーションがとれたとき。

今回、子育てをしていて嬉しかったことで多かったのが、「子どもの成長を感じたとき」「子どもの笑顔を見たとき」という意見である。笑顔というのは最もその子の感情がわかりやすい表情である。なかには、困っているとき、自分の気持ちを表現するのが苦手で笑ってしまう子もいるが、障害の有無に関わらず、他人の笑顔を見るととても幸せな気持ちになる。誰もが当たり前でできると考えがちになってしまうこと、それは本当の当たり前ではなく、障害をもってうまれてきた子どもにとって、できるようになるまで時間がかかったからこそ、子どもの成長は本人も含め、周囲の喜びは大きなものになるのではないかと考える。

また言葉でのコミュニケーションというのは子ども本人から直接発せられる言葉ということで、最もストレートに感情が伝わりやすく、普段の何気ない会話も保護者にとって喜びになっているのではないかと考えられる。

2) 子育てをしていて心がけていること

表7 子育てをしていて心がけていること

回答抜粋	備考
目を見る。オーバーリアクション。一緒に笑う。小さなことでもすんごくほめる。いろんな場面で「待って」あげること。なんでもできるだけ笑顔で教えてあげる。	(20代女性)
「いま、ここ」に意識を集中する事。過去や未来をあれこれ思い描かない事。	(40代女性)
自分で出来ることは時間がかかっても自分でやらせる。長い目でみまもる。体調管理(親も子供も)	(40代女性)
障害があるからと言ってわがままになったり、社会的ルールのない人にならないように育てたいとよく思っている。(でも障害だからどうしても仕方ない部分なのか、注意や叱ったりすることで変わっていくものか、よくわからないことが多く、接し方は困ることが多い。)	(40代女性)
焦らない。人と比べないこと。母と子で決めた約束は互いに守ること。	(40代女性)

- ① 子育てに対する考え方。
- ② 実際に子どもと関わる上で心がけていること。
- ③ 子どもの将来のために心がけていること。
- ④ 体調管理。

保護者は、毎日の生活を通して、自身の子育てに対する考えや、思い、決まりをしっかり持ち、子育てをしていることがわかった。目先のことだけでなく、将来のことを考え、障害があるからと言って、わがままになってしまったり、社会的ルールのない人にならないように子育てをしている保護者が多数いた。なかには、子どもの将来を考えて接しているが、障害のある子どもに対してどこまで求めていいのかわからず、と接し方に困っている保護者もいるようだ。

3) 子育てをする上で支えられた人

回答で、多かったのが「夫」と「教員」という回答である。今回の回答者全てが女性ということもあり、「妻の両親」という回答も多かった。その他、子どもに支えられたという回答も多く、子どもの成長や日々の姿に保護者は、悩みや不安を感じながらも子ども自身に支えられることもあるようだ。それ

表8 子育てをする上で支えられた人 (複数回答あり)

夫	12名
妻	0名
夫の両親	3名
妻の両親	11名
兄弟	4名
お子様	9名
友人	8名
教員	11名
専門家	3名

ぞれ支えとなる場面や悩みは違うものの、子育てをする上で、保護者はたくさんの人に支えられながら子育てをしているようだ。

4) どのような時に、どのようなサポートを受けたか

表9 どのような時にどのようなサポートを受けたか

回答抜粋	保護者
不眠、排泄の失敗、動作の止まりなど子供が不調になった時預かって私を休ませてくれた。不調の原因について一緒に考えたり、解説したり、試行したり、相談に乗ってくれた。	(40代女性)
自分が強く叱り、落ち込んだ時。子供の成長に悩んだ時などに考え方のきっかけをくれた。	(40代女性)
生後育てる自信を失ったとき必死で夫も辛いのに私を支えてくれた。長年に渡って一定の距離をもち、見守ってくれた。子育てで悩んだ時に一緒に悩み、考えてくれた。	(30代女性)

〈サポートを受けた場面〉

- ① 子どもが不調になったとき
- ② 自分自身が子育てへの考え方や方法について悩んだとき

〈サポートの内容〉

夫：身体的なサポート、精神的サポート
 両親：身体的なサポート精神的サポート、(経験を
 含め)技術的なアドバイス
 専門家：技術的なアドバイス、精神的サポート

教員：身体的なサポート、精神的サポート、(経験を含め)技術的なアドバイス

どんなときに支えられたかについては、保護者への身体的なサポートや、精神面でのサポートが挙げられた。さらに、具体的に技術的なことをアドバイスするという技術面でのサポートがあり、合わせて3点に分けられた。

夫は子育てを共に行き、妻が子育てから離れ、自分のために使う時間がもてるように身体的なサポートをする。時には一緒に悩み、一緒に頑張ろうという精神面のサポートを行っていると考えられる。両親は夫と同様に身体的なサポートだけでなく、程よい距離を保ちながら、障害をもつ子どもの両親を精神的な面で支える。また長年の経験を生かし、子育てのアドバイスをし、技術面でのサポートを行っているようである。専門家は診察で、子どもの実際の様子や、子ども本人にとって適した環境や支援を考え、保護者に技術面でのアドバイスをしているようだった。

このように身体的サポート、精神的サポート、技術的サポートを、必要な時に受けられる環境を整えていくことが重要であると考えられる。

5) 教員にしてもらって嬉しかったサポート

表10 教員にしてもらって嬉しかったサポート

回答抜粋	保護者
たくさんあってわかりません。常に笑顔で接してくれることかな？連絡帳は私の宝物になっています。私のいないところでどんな風に成長しているのか事細かに教えてもらえるので。	(20代女性)
なわとび、自転車、ローラースケート、さしこ、皮太鼓など家では教えきれないもの挑戦させてできるようになったものがあったことや、運動会の選手宣誓、合同発表会、宿泊学習、応援団などの体験。子供を可愛いと認めてくださること。	(40代女性)
毎日めいいっぱい子供を遊ばせてくださるので、子どもが夜ぐっすり寝てくれるので助かります	(30代女性)
なんでも完璧にしなくても良いですよ、と言われた時。家では子供さんがやりたいようにすれば良い、あとは学校に任せてくださいと言われた時など。	(40代女性)

学校の先生については子供の事、子供の事からくる悩みや愚痴などあらゆる事を連絡帳や電話などできいてもらったり、何かあればいつでも力になりたいという姿勢をいつも見せてくださっている事。	(40代女性)
たくさんほめてもらったこと。小さな発達を伝えてもらったとき。	(40代女性)

- ① 困った時にすぐにこまめに対応してくれること。
- ② 学校での成長を伝えてくれること。
- ③ 家でできないような経験をさせてくれること。
- ④ 子どもの良さに気付いてくれること。
- ⑤ いつも相談にのってくれること。

保護者は教員から受けたサポートで、子どもに対する支援や、子育てをしていて困ったときの対応に教員に思いがあるようだった。保護者のなかには、「学校での様子、子どもの見えない成長を知ることができる連絡帳は宝物だ」という意見もあった。このことから子どもの良さを発見し、新たな一面をこまめに伝えることはとても大切なことだと言える。

また、「支援や子育てをしていて困った時に教員がすぐに対応してくれ、保護者の思いに寄り添い、相談にのってくれる姿勢が嬉しかった」という意見があった。それは教員がいつでも保護者を支えたいという気持ちをもちながら、保護者や子供たちと関わっていることからくるのではないかと考える。

6) 教員にどんなサポートをしてもらいたいのか

表11 教員にどんなサポートをしてもらいたいのか

回答抜粋	保護者
今の担任の先生には十分のサポートをして頂いていると思います。今は思い浮かびません。	(20代女性)
箸の使い方。ひもの結び方などいっぺんにできないものをどうゆう風にして教えればいいのかの的確なノウハウと目標の設定。個別の対応（生徒それぞれ障害のレベルや内容が違うので）。	(40代女性)

休日も子供を預かってくれるようなシステムが出来るといいですね。せめて土曜休みをやめてほしいですね。	(30代女性)
精神的な面では現在のサポートに満足している。ただ、療育面では本当はこういうやり方でやってほしいなどいろいろ注文してみたい事がある。そうゆう面でも自分が求めていけば良いのかもしれませんが今はできていない。	(40代女性)
家庭と学校と統一した本人への対応。	(40代女性)
障害児との生活は1日中ある。学校だけでなく、生活の困りごとについて直接には担任は関われないが、一緒に考えたり、経験を教えてくれると良いと思う。(今まで担当した子どもたちはたくさんいると思うので。)	(30代女性)
家での時間や本人の抵抗の問題で指示を受け付けない(トイレや食べ物の好み)ものを学校環境のなかで習慣づけとして指導してほしい。	(40代女性)

- ① 今のサポートで満足している。十分だ。
- ② もっと子どもをみて個別の対応をしてほしい。
- ③ 技術的な子育ての的確なノウハウを具体的に教えてほしい。
- ④ システムとして子どもをもう少し預かってほしい。
- ⑤ 学校と家庭とで、統一した対応。家庭での子どもの様子からくる、困り感についての相談。

今後、どんなサポートを受けていきたいかという質問に対して、満足しているという回答が多数あった。その他に、精神的な面では満足しているが、療育的な面ではもう少し、個別な対応をしてほしいという意見や、子育ての技術的なノウハウを教えてほしいという意見があがった。その他、システムとして子どもをもう少し預かってほしいという意見があがった。保護者が満足しているという意見が多数あがったが、これは、保護者が求めるものと教師の実際のサポートが一致していたためと考えられる。学校生活での子どもの様子や、それを取り巻く教員の姿勢に対しては満足の声が多くあがっているが、保

護者からはさらに今後、家庭での子どもの様子についても具体的なアドバイスがほしいとも思っているようである。学校生活だけでなく、保護者は一日中一緒にいる、子どもとの生活についても教員と一緒に考えていきたいと考えているのだろう。

7) 教員とどのような関係を築いていきたいか

表12 教員とどのような関係を築いていきたいか

回答抜粋	備考
常に何でも腹を割って? 話せるような友好的な関係を保ってあげたいなあと思います。	(40代女性)
悪いこと、失敗したことももっと積極的に話してほしい。子供と先生も親と先生も信頼関係が大切だと思う。	(40代女性)
子供と先生方と一緒に育てていけるように何でも話し合えて信頼関係を築いていけると良いと思います。	(30代女性)
今のままで良いです。毎日元気に帰宅出来れば良いです。	(30代女性)
先生と保護者というより、人と人として付き合える先生と巡り合いたい。そして今巡り合えたことに感謝しています。	(30代女性)
難しいです。先生と保護者の距離を保ちつつ、子供のことについて相談しやすい関係かな?	(20代女性)

- ① 信頼関係を築いていきたい。
- ② なんでも相談し合える関係を築いていきたい。
- ③ 一緒に育てていけるような関係を築いていきたい。
- ④ 人と人としての関係を築いていきたい。

教員は、保護者の毎日のこまめな連絡から、随時お互いの悩みを知り、悩みに寄り添い考えていく。必要があれば、学校と家庭が連携して行う指導を行う。教員は保護者の思いを受け止めつつ、学習での願い、支援方法、成果などを、理想論にならないように実際の子どもの姿を通して伝えていく。これが、なんでも話せて、教員、保護者が「一緒に育てる関係」といえるようである。また、通常、「教師」というのはどうしても保護者と縦の関係になりやすいが、教員側が「保護者の方が人生の先輩であるこ

と」、「子どもとの関わりでもずっと経験があること」を意識する。そして、保護者の方から学ぼうという姿勢を常に持っていくことで、縦の関係から横の関係、つまり、「信頼し合い、人と人としての付き合い」ができるのではないかと考える。

(3) 教員の回答

1) 教員をしていて嬉しかったこと

表13 教員をしていて嬉しかったこと

回答抜粋
職員、保護者、子供の三者が一体感をもって取り組めた実感できた時。
子供が成長していく事を様々な機会（日常生活・行事等）で実感できること。
毎日一緒に学校生活が送れることは楽しいことであり、嬉しいことです。特別支援学級の経験だけですが、卒業した後もしっかり働いて生活できていると嬉しいです。初めて会った日はお互いに思いが通じなかったのが毎日の生活のなかでお互いの気持ちが通じるようになるのは嬉しいです。
子どもたちのできなかったことができるようになったとき。手立てなど支援が的確にできたとき。

- ① 子どもの成長。
- ② 手立てや支援がうまくいったこと。
- ③ 保護者の子育てに対する前向きな変化。
- ④ 子どもを理解し、子どもの思いをくみとれたこと。
- ⑤ 卒業後の活躍。

教員は、子どもが成長したときや、自分で考えた子どもに対しての手立てや支援が的確にできたときに嬉しいというような意見があがった。また、子どもとの信頼関係を築きながら、その時、子どもがどんな思いなのかを理解することで支援も広がっていくようだった。一人ひとりの子どもにあった支援や関わりをしていくことで、子どもは大きく成長すると考えられ、成長した子どもの姿に保護者も喜び、保護者が前向きに子育てをしていくことが更に教員の喜びにもつながっていた。教員、子ども、保護者の三者が同じ願いや目標をもつことで、三者に一体感が生まれ、子どもにとってより良い支援、そして成長につながるのではないかと考えられる。

また、卒業後の子どもたちの活躍は教員にとって大きな喜びとなっているようだった。

2) 教員をしていて苦勞したこと

表14 教員をしていて苦勞したこと

回答抜粋
子供の理解不足でパニックにしまったり、知識や時間のなさから保護者と共にじっくり取りくむことができずにいることがいくつかある。
特別支援学級にいる時に、上司の先生に理解してもらえなかった。
日々、自分が思っていること(子どもへの支援や成長の方向性など)がその子に対してよい方向に向いているのか。
日々子どもへの支援。保護者や教師集団との共通理解。
授業、行事の準備。事務処理。
子どもに自分の想い(指示なども)が伝わらないとき。もっと工夫して伝えなければいけないと反省します。
自分の経験不足やアイデア不足。

- ① 子どもに対しての支援や手立てがうまくいかなかったこと。
- ② 知識や経験などの自身の力量不足についての悩み。
- ③ 作業や資料づくりなど物理的に時間がたりない。
- ④ 教員間の共通の理解が得られないというような環境的な問題。

教員は常に日々、支援の向上を目指している。その結果、支援が成功することもうまくいかないこともある。試行錯誤の結果、その子に必要な支援がどのようなものなのか、その子に適切な支援はどれなのか教員自身知識の幅を広げていく必要がある。また、子どもたちともっとじっくり関わりたいという本心との一方で、作業や、事務処理の時間にとられてしまうこともあるようだ。「環境」についてはまだまだ特別支援に対しての理解が浅く、特別支援に対してマイナスなイメージがあるのではないかと考える。もっと現場に立つ人だけでなく、たくさんの人の特別支援に対する興味関心を高めていく必要がある。

3) 子どもとの関わりで大切にしていること

表15 子どもとの関わりで大切にしていること

回答抜粋
できることや、やる力のあることは一人で。成功体験の積み重ねによる楽しい学校生活。
子どもの思いを第一にすること。子どもの中に原因を求めず、自分を含めた子どもの環境をどうするか考えること。
一番やさしくて、一番厳しい人になろうかと考えています。
信頼関係。決して一方的な指導にならないように心掛ける。
一人の人間として尊重すること。

- ① 子どもの気持ちを理解すること。
- ② 子どもに向かう姿勢。
- ③ 子どもができる環境づくりをする。

教員は、子ども本人との関係づくりや、教員が子どものことを知ることから始まり、子どものありのままの姿を受容し、理解していく努力をしていた。そして、子どもが本来持っている力を十分に発揮できるような環境づくりをし、日々支援しているのではないかと考える。

4) 保護者との関わりで大切にしていること

表16 保護者との関わりで大切にしていること

回答抜粋
保護者の思いにまずは寄り添う事。その方、その方の考え方を知ること。
一番悩んでいる人。できるだけ親身になりたいと思い、連絡帳の様子が必要があれば電話など。
保護者の思いを受け止めつつ、学習での願い、支援方法、成果などを、子どもの姿を通して伝えていくようにしている。(理想論にならないように)
保護者の話をきく。家での様子、困っていること、等伺う。そして解決策も共に考える。その後も経過を時折きく。子どもの姿、ねがいは卒業後をイメージしつつ、保護者と話をするようにする。(小学部なので特に)

保護者の方が人生の先輩であり、子どものかかわりもずっと経験があるので、保護者の方から学ぼうという気持ちが常にあります。その上で自分が感じていることや学校での様子などを話しています。大切にしているのはよく話を聞くということでしょうか。

誠意をもって対応すること。保護者目線で考えること。

- ① 保護者の思いに共感すること。
- ② 保護者の思いや考えを知るための姿勢を見せた上での関係づくり。
- ③ 子ども実際の姿を通したお互いの理解や連携。

保護者はたくさんの悩みを抱えながら、日々子育てをしている。そんな中で教員と保護者の連携姿勢はとても大切ではないかと考える。教員は現在、まず保護者の悩みや保護者一人ひとりの子育てに対する考え方を教えてもらうための関係づくりから始めている。教員は「何かあれば力になりたい」「保護者の支えになりたい」「小さな成長も保護者に知ってもらい喜んでもらいたい」という気持ちを持ち、それを保護者に伝えていた。

この結果から、保護者の思いを知り、保護者の思いに共感し、保護者に寄り添っていくことはとても大切なことだと考えられる。お互いの支援を振り返り、反省し、また悩み、実行し、子どもの成長を目標にして日々試行錯誤する。日々の小さな目標から始まり、目先のことばかりでなく、子どもの将来をイメージした対応をしていることもわかった。

5) 保護者との関係で失敗したこと

表17 保護者との関わりで失敗したこと

回答抜粋
親の思いをくみ取れていないと思った時。
今の学級はみんな初めての特別支援で、ベテランがいないことに保護者が不安がっている。
たくさんあるのですが、具体例が浮かびません。でも困った時に助けてくれたのも保護者でした。
言葉の使い方(言い回し)で誤解を招いた。
子どもが家庭で落ち着かなくなったのに、学校での良い様子ばかりを伝えるだけで子ども、保護者の困り感に寄り添うことをおろそかにした。そのことで信頼を失った。

保護者からの質問に曖昧な答え方をしてしまったことです。

こちらの願いが一方的になったこと。子どもの見方がぶれていて先走りすぎになったこと。うまくフォローできなかったこと。いろいろあります。

- ① 伝え方や表現方法の失敗。
- ② 思いのくみとりについての失敗。
- ③ チームティーチングの難しさ。
- ④ 人と人としての付き合いについて教師と保護者についての距離の保ち方。
- ⑤ 保護者に助けてもらった。

教員のなかには自身の専門性や経験のなさに悩みを感じ、保護者が自分たちの支援に不安を感じているのではないかと、マイナスな保護者の思いをくみ取ってしまった人、逆に保護者の思いを知りたいと思ひ努力するが、思いがくみ取れず悩んだりしている者もいた。他にも、保護者を喜ばしたい、子どものいいところを知ってほしいと気持ちから、学校での良い様子ばかり様子を保護者に伝えたところ、家での子どもの様子との違いに保護者は不安になり、教員は保護者の困り感に寄り添えなかったと反省していた。その結果、保護者が学校に不信感を抱き、信頼をなくしてしまったこともあったようだ。

保護者との間には失敗などもあるが、最後に助けてくれたのも保護者だったという意見もあり、保護者との関係は教員にとって良い関係を築きたいという思いから悩む問題でもあり、保護者は教員にとって支えにもなっているということがわかった。

4. 総合考察

ここでは教員と保護者の両者の質問紙調査の結果から、1) 保護者が望む支援、2) 教員と保護者の関係の在り方について総合的に考察する。

(1) 保護者が本当に望む支援とは

教員が保護者との関係において重視していることとして「保護者の思いを知るための関係づくり」、「保護者の思いを知った上での共感姿勢」、「子どもの実際の姿を通したお互いの理解や連携」の3点が挙げられた(表16)。

保護者は、教員から受けて嬉しかったサポートに、「困ったときのすぐさまな対応」、「学校での成長をつたえてくれること」、「家ではできない経験をさせてくれること」、「子どもの良さに気付いてくれること」、「相談にのってくれること」という意見を挙げていた(表10)。

教員、保護者の両者の意見から、教員が「保護者との関係で大切にしていること」と、保護者が「教員にしてもらって嬉しかったサポート」は一致しているといえよう。

しかし、教員の中には、自身の専門性のなさに悩みを感じ、保護者が自分の子供たちへの支援に不安を感じているのではないかと保護者のマイナス面の思いをくみ取ってしまった教員もいた。逆に、保護者の思いを知りたいと思ひ努力したものの、思いがくみ取れず悩んだ教員もいた。保護者を喜ばしたい、子どもの良いところを知ってほしいという気持ちから学校でのいいところばかりを保護者に伝えたところ、子どもの家での様子との違いに保護者が不安になったという事例もあった。

「子どもの良いところを伝える」というのは、本来良いサポートと考えられるのに、良い結果に結び付かなかったのは、なぜだろうか。それは、子どものマイナス点も含めた学校での実態を知りたいという保護者とできるだけ「子どもの良いところを伝えたい」という教員の思いにずれがあったからではないかと思われる。ただ、学校での子どもの良いところを伝えるだけでなく、保護者の困り感に寄り添うことが大切なのではないだろうか。まず、教員が保護者に対して「何かあったら力になりたいという姿勢」を見せ、保護者の困り感に寄り添い関わっていくこと、それが、保護者が本当に望む支援ではないのかと考える。

また、保護者は教員に「もっと子どもをみて個別の対応をしてほしい」「技術的な子育ての的確なノウハウを教えてほしい」というような意見を挙げていた(表11)。このことから、教員は、子ども一人ひとりに合った個別な支援を考え、経験を積みあげた上で、それらの経験等を保護者に話したり、その時の解決策を話したりすることが、保護者の安心感につながるのではないかと考える。

(2) 教員と保護者の関係の在り方

保護者に「教員と今後どんな関係を築いていきたいか」という質問をしたところ、「信頼関係を築いていきたい」「なんでも話せる関係を築いていきたい」「一緒に子どもを育てる関係を築いていきたい」「人と人として付き合っていきたい」という意見が挙がった(表12)。それでは、このような関係はどのように築くことができるのだろうか。

教員による毎日のこまめな連絡から、保護者は学校での子ども様子を知ることができ、同時に教員の子どもへの姿勢、支援の考えを知ることができる。また、教員は保護者の悩みを知り、その悩みに寄り添うことができる。これが、何んでも話せて、教員と保護者が子どもを「一緒に育てる関係」といえるのではないだろうか。最も大切なのは、教員と保護者がお互いに子どもの成長イメージや子どもへの願いを共有することではないかと考える。それは、教員と保護者が一体となって、子どもの成長へのイメージ、願いを共有することで、学校と家庭で共通した支援ができると思うからである。

質問紙調査の結果から、現在、保護者と教員の間ではこまめに連絡帳や電話連絡で子どもの様子がやりとりされていることがわかった(表10)。保護者から、「自分のいないところでどんな風に成長しているかわかる連絡帳は宝物となっている」というように、現段階で、教員による学校場面でのサポートに対して保護者は満足していた。しかし、保護者から「障害児との生活は1日中ある。学校だけでなく、生活の困りごとについて直接には担任は関われないが、一緒に考えたり、経験を教えてくれると良いと思う」という意見も挙げられた(表11)。このことから保護者は、学校場面だけでなく、教員に家庭で

の生活面も一緒に考えてほしいという願いを持っていることが推察される。学校場面、家庭での生活場面の両方から、子どもの情報を共有することで、先に述べたような子どもの成長イメージや子どもの願いへの共有につながるのではないかと考える。

通常、教員はどうしても保護者と縦の関係になりやすいが、教員側が「保護者の方が人生の先輩であること」、「子どもとの関わりでもずっと経験があること」を意識し、教員は保護者から学ぼうという姿勢を常に持っていくことで、縦の関係から横の関係、つまり、「信頼し合い、人と人としての付き合い」ができるのではないかと考える。本当に必要なのは、縦からの援助ではなく、横からの細やかな支援なのではないだろうか。

具体的にどのような関わりが「保護者との信頼関係」につながるのか、今後の筆者の課題としたい。筆者自身が教員になった時、筆者が出会った教員のように、子どもの思いに寄り添いながら、本気で子どもと向き合える教員を目指し、保護者と「人と人との関わり」ができるように努力していきたい。

本論文作成にあたり、質問紙調査に協力して下さった、F特別支援学校の先生方、ならびに保護者の方々に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 吉岡恒夫、2008、特別支援教育における保護者への支援、保護者との連携、治療教育学研究、28、11-19.
- 2) 吉岡恒夫、2009、特別支援教育における保護者への支援、保護者との連携②、治療教育学研究、29、27-35.